

複素数値関数を項にもつ級数のノルム収束と正規収束を定義した。正則関数の展開定理におけるべき級数の収束は、正規収束によるものである。次に正則関数の一致の定理と最大絶対値の定理の証明を行なった。

定義 1.5 (ノルム収束). E を空でない集合とすると、集合 E 上で複素数値関数項の級数 $\sum_{\nu \geq 0} u_\nu$ がノルム収束するとは、 $\sum_{\nu \geq 0} \|u_\nu\|_E < \infty$ が成立することである。ただし、

$$\|u\|_E = \sup \{|u(x)| \mid x \in E\}$$

とする。

練習問題 1.3. E を位相空間、 $C(E)$ を E 上の複素数値連続関数の全体とすると、 $\{u_\nu\}_{\nu \geq 0} \subset C(E)$ であつ、 $\sum_{\nu \geq 0} u_\nu$ がノルム収束するならば、 $\sum_{\nu \geq 0} u_\nu \in C(E)$

定義 1.6 (正規収束). $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ を開集合とすると、 Ω 上で複素数値関数項の級数 $\sum_{\nu \geq 0} u_\nu$ が正規収束するとは、 Ω 内の任意のコンパクト集合 K に対して、 $\sum_{\nu \geq 0} \|u_\nu\|_K < \infty$ が成立することである。すなわち、 Ω 内の任意のコンパクト集合 K でノルム収束することである。

補題 1.1 (Cauchy - Taylor の表現定理). $\Delta = \Delta(\vec{c}, \vec{r})$, $f \in C(\partial_0 \Delta)$ に対して、

$$\hat{f}(\vec{z}) = \frac{1}{(2\pi i)^n} \int_{\partial_0 \Delta} \frac{f(\vec{\xi}) d\vec{\xi}}{\vec{\xi} - \vec{z}} \quad \text{for } \forall z \in \Delta$$

とおくと、 $\hat{f} \in C^\infty(\Delta) \cap \mathcal{A}(\Delta)$ で、

$$\partial^J \hat{f}(\vec{z}) = \frac{J!}{(2\pi i)^n} \int_{\partial_0 \Delta} \frac{f(\vec{\xi}) d\vec{\xi}}{(\vec{\xi} - \vec{z})^{J+e}}$$

また、 $\hat{f}(\vec{z}) = \sum_J \alpha_J (\vec{z} - \vec{c})^J$ という形に展開でき、

$$\alpha_J = \frac{\partial^J \hat{f}(\vec{c})}{J!} = \frac{1}{(2\pi i)^n} \int_{\partial_0 \Delta} \frac{f(\vec{\xi}) d\vec{\xi}}{(\vec{\xi} - \vec{c})^{J+e}}$$

系 1.4 (正則関数の展開定理). f を開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ 上の正則関数とする。任意の $\vec{c} \in \Omega$ に対して、 $\bar{\Delta} \subset \Omega$ となるように、 $\Delta = \Delta(\vec{c}, \vec{r})$ をとると、 f は Δ でべき級数展開される。

$$f(\vec{z}) = \sum_J \alpha_J (\vec{z} - \vec{c})^J, \quad \alpha_J = \frac{\partial^J \hat{f}(\vec{c})}{J!} = \frac{1}{(2\pi i)^n} \int_{\partial_0 \Delta} \frac{f(\vec{\xi}) d\vec{\xi}}{(\vec{\xi} - \vec{c})^{J+e}}$$

ここで、級数 $\sum_J \alpha_J (\vec{z} - \vec{c})^J$ は Δ で正規収束する。

定理 1.12 (一致の定理). f を連結開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ 上の正則関数とすると、

$$(\partial^J f)(\vec{c}) = 0 \quad \text{for } \forall J \neq \vec{0}$$

なる $\vec{c} \in \Omega$ が存在するならば、 f は Ω 上で定数である、

⁴数学工房 <http://www.sugakukobo.com/>

系 1.5. f を連結開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ 上の正則関数とすると、 $\bar{c} \in \Omega$ の近傍で f が定数となるような $\bar{c} \in \Omega$ が存在するならば、 f は Ω 上で定数である、

定理 1.13 (正則関数の最大絶対値の定理 (*Maximum Modulus Principal*)). f を連結開集合 $\Omega \subset \mathbb{C}^n$ 上の正則関数とすると、 $|f|$ が $z_0 \in \Omega$ で最大値をとるのは、 f が Ω 上で定数の場合に限る。

記録 by J.S